

平成二十七年十二月

# えひめの交通安全へ

## 子供の願い

——交通安全に関する小・中学校児童生徒の作文第三十八集——

一般社団法人 愛媛県交通安全協会

## は し が き

愛媛県交通安全協会・県内十八の地区交通安全協会では、愛媛県教育委員会の後援により、小・中学生を対象に、毎年「えひめの交通安全へ子供の願い」作文を募集しています。

この作文募集は、小・中学生の情操教育に資するとともに交通安全について関心を高め、子供の交通事故防止を図ることを目的に、昭和五十三年から実施しているもので、本年は小・中学校合せて百七十四校から一千二百六十五編という多数の応募がありました。

この応募作品について、地元の地区交通安全協会で第一次審査に付した後、上申のあった九十七編を愛媛県教育委員会に厳正な審査をお願いして、愛媛県交通安全協会入選作文として二十五編を選んいただきました。

作文の多くは、子供たちが身近に体験したこと、家族や友達が事故の被害者になったことなど、交通安全や交通事故を他人ごとではなく、自分自身のこととして安全への願いが切実に訴えられており、ひしひしと胸に迫るものがありました。「交通安全は家庭から」と言われていますが、まさにお茶の間の団らんは生きた交通安全教育の場であることを物語る作品も数多くありました。

この純真な気持ちを「交通安全」に役立てていただくために、入選作文二十五編を「えひめの交通安全へ子供の願い」作文第三十八集として発刊いたしました。

この作文集が家庭や学校等で、一人でも多くの方に読んでいただき、交通安全への関心と認識をより一層高めていただければ望外の喜びです。

最後に、この作文集発刊のために御協力いただいた関係者の皆様にお礼を申し上げますとともに、今後とも交通安全に御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成二十七年十二月

# 愛媛県交通安全協会入選作文目次

## 「小学生の部」

こうつうじこがなくなるように	四国中央市立豊岡小学校	一年	坂本莉良	1
キッズガードのおばさん、ありがとう	四国中央市立松柏小学校	二年	藤本琉衣	2
弱虫は安全うんてん？	四国中央市立川之江小学校	三年	石川ももこ	3
とうとい命	鬼北町立三島小学校	三年	清家冴絵	4
ありがとうおばあちゃん	西条市立大町小学校	四年	奥平絢女	5
命と交通安全	東温市立拝志小学校	五年	かちようひさき	6
事故から学んだこと	内子町立内子小学校	五年	どい ななみ	7
交通事故 <sup>ゼロ</sup> のために	西条市立西条小学校	六年	くにた みのり	9
命を守るヘルメット	今治市立常盤小学校	六年	くにた みのり	9
みんなで取り組む交通安全	伊予市立南山崎小学校	六年	たなか いちご	10
私の交通安全	大洲市立喜多小学校	六年	たかいし あいり	11
			高石愛莉	11
			神野莉穂	13

## 「中学生の部」

家族を悲しませない	今治市立大島中学校	一年	関陽芽子	15
交通安全について考える	松山市立三津浜中学校	一年	中平大介	16
私の願い	東温市立川内中学校	一年	小倉詩絵里	18
お世話をしてくれたひいばあちゃん	東温市立重信中学校	一年	今井愛佳	19
命を守るヘルメット	八幡浜市立愛宕中学校	一年	橋田佳奈	21
無駄な事故を減らすために	西条市立西条北中学校	二年	矢野彩都美	23
ヘルメット着用の安全性	愛媛大学教育学部附属中学校	二年	梶野孝介	24
兄のヘルメット	松山市立桑原中学校	二年	野上千風優	25
危機意識をもって交通事故防止	愛南町立一本松中学校	二年	木築虹子	26
自分の命を自分で守るために	新居浜市立西中学校	三年	河野有里子	28
守ろう大切な命	愛媛大学教育学部附属中学校	三年	児島芽依	29
その行動が与える力	愛媛大学教育学部附属中学校	三年	家木里紗	31
交通事故を減らすためにできること	松山市立内宮中学校	三年	齋藤太一	32
自分の命を守るために	八幡浜市立真穴中学校	三年	井上桃華	34

愛媛県交通安全協会入選作文（二十五編）

## 【小学生の部】

### こうつうじこがなくなるように

四国中央市立豊岡小学校

一年 **坂本** さかもと **莉良** りら

「いつてらっしゃい。くるまにきをつけてね。」  
わたしが、そとであそびにでるとき、いつもパパやママに  
いわれることばです。

わたしのおじさんは、わたしがうまれるずっとまえにバイ  
クとくるまのじこで、なくなりました。そのとき、みんなか  
なしかったそうです。だからパパやママは、わたしがじこに  
あわないように、そいいいます。もし、パパやママ、いもう  
とがじこにあつたらとかんがえると、かなしいおもいでなみ  
だがでそうになりました。わたしは、かなしいきもちにみん  
ながならないように、じこにはあいません。

では、じこにあわないようにするために、どうしたらよい  
のかとかんがえました。どうろをわたるときは、みぎひだり  
をかくにんし、おうだんほどうをてをあけてわたります。く  
るまが、たくさんとおるところではあそびません。どうろで  
じてんしゃはのりません。わたしは、そとであそぶときかな  
らずこのやくそくをまもります。

くるまをうんでんするひとにも、おねがいがあります。わ  
たしがとうげこうのとき、くるまがこわいとおもったことが  
あります。それは、スピードをだしているくるまがよこをと  
おったときや、あるいているわたしのちかくを、とおりすぎ  
るくるまです。なので、つうがくるではスピードをおとして  
はしってください。またあるいているわたしたちとは、きよ  
りをとってはしってください。こうつうじこで、かなしいお  
もいをするひとがいなくなるように、こうつうじこがなくな  
るように。



# キッズガードのおばさん、ありがとう

四国中央市立松柏小学校

二年 藤本 琉衣  
ふじもと るい

わたしのいえから、小学校まで、歩いて二十分かかります。朝七時十五分にいえを出て、六人でしゅうだんとう校をします。弟は、九時によりち園バスがむかえに来てくれるのに、小学生のわたしは、朝も早いし、おもいナツブランドをせおって歩くので、大へんです。

しばらく歩くと、交差点があります。そこにはいつも、キッズガード、とかいたふくをきたおばさんたちがまっつてくれています。おばさんたちは、わたしたちがあんぜんに道ろをわたれるように、おうだん歩道で手をひろげて、車からまもつてくれます。雨の日も、風が強くてさむい日も、まい朝まい朝、わたしたちのために立ってしてくれます。

今年の春、その交差点まで歩いて来たところで、じゅぎょうでつかうけんばんハーモニカをわすれたことに気づきました。わたしがこまったかおをしているとおばさんが、

「カバンもつていてあげるから、おうちまでとりに行っておいで。でも走ったらあぶないけん。ゆっくり気をつけて行くんよ。」

と言ってくれました。わたしは、いつもより気をつけながら歩きました。本とうは、走って行きたかったけど、おばさんとやくそくしたことをまもって歩きました。

その時、細い道で、むこうから自てん車にのった中学生の

お姉さんが来ました。歩くのをやめて、はしつこによつている方があんぜんかな、と思つてそうしたら、お姉さんがとおる時、おじぎをしてくれました。これからこの道でだれかとすれちがう時は、先によつていてあげようと思ひました。どんなにいそいでいても、よく見てゆつくり歩くこと、それと、道ろに出たら、あぶなくないかな、こうした方があんぜんかな、とじ分で考えることも大切なんだとわかりました。

わすれものをとつて、おばさんがまっつてくれている交差点へもどつた時、また、

「気をつけていくんよ。」

と言つて、手をひろげて、おうだん歩道をわたらせてくれました。その時、やさしい気もちがつたわつてきて、心があたたかくなりました。おばさんたちも、バイクのつて来ているので、いえまで気をつけてかえつてほしいなあと思ひました。

二学きになつて、またおばさんたちに会つたら、つきはいつもより大きな声で

「おはようございます。」

とあいさつしたいです。それと、

「いつもありがとうございます。」

と言ひたいです。これからも、車にきをつけてあんぜんにとつ校しようと思ひます。

# 弱虫は安全うんてん？

四国中央市立川之江小学校

三年 いしかわ 石川 ももこ

わたしは、この春、自てん車けん定に合かくしました。

わたしは、ようち園の年長の時まで、ほじよりんなしの自てん車にのれませんでした。ぐらぐらしてころんだらどうしよう。前から車が来たらどうしよう。横から人がとび出してきたらどうしよう。とおそろしい事ばかりそうぞうしてしまっていたので、こわくて、自てん車をこぎすすめることができませんでした。

お母さんに、

「ももこは、弱虫だし、ビビりだから自てん車にのれないんだ。」

と言うと、お母さんは、

「それはちがうよ。そんなことをそうぞうできるなんてえらい。すごい。自てん車や、車にのる時にそういう気持ちが一番大切なんよ。もしかしたらってそうぞうすることが安全にくらすには一番大切。ももこはのれないはずがない。」

と言ってくれました。わたしは自分のこわがりなところがきらいだったけれど、それが交通安全とつながっていたなんてびっくりしたし、がんばるぞ、とゆう気が出ました。そしてわたしは一生けんめいれん習をしました。そしてとうとうのれるようになった時、うれしくて涙が出ました。

わたしの家のすぐ近くには急な坂があります。わたしは平

らな道は大じょうぶだけど、この坂はまだ自てん車では下りれません。お姉ちゃんの友だちは、その坂を登ってよく遊びに来てくれます。帰りはもちろんその坂をおりていきますが、「しっかりブレーキをかけてね。」

いつもお母さんや、お姉ちゃんや、わたしも、その友だちに、声をかけます。坂の下には交差点もあるので、とつてもちゆう意がひつようだからです。

自てん車けん定のれん習で、ふみ切りでは、自てん車をおすことを知りました。でも、それをしっかりできているのは子どもだけで、大人のほとんどが自てん車にのったままわたっていたのをテレビで見ました。わたしは、大人にも、もう一ど自てん車のルールをポスターなどでお知らせできたらいいなあと思いました。せっかく知ったルールなので、わたしは大人になっても忘れたくないな。と思います。そして、わたしのこわがりな、わたしをまもってくれていることもわすれたくないと思います。



# とうとい命

鬼北町立三島小学校

三年 清家 冴絵

「あ、あぶない。早くにげて。」

と、大声でさけんだしゅん間、兄があわてて弟をだきかかえ、道路わきに、にげました。

その後、車は、わたしの目の前を、すごいスピードで通りすぎました。わたしは、ほっとむねをなでおろしました。

まだ二才になったばかりの弟は、ちょうど足がじょうぶになって、ごそごそ動き出したところです。その弟が、目を丸くして、兄にしがみついたまま、しばらくじっと動きません。そうとうこわかったのか、その後、なみだをポロポロこぼしながら、

「ママ、ママ、ママー。」

と、さけび声を上げて、なき出しました。その声を聞いて、母が、あわててかけつけてきました。

「お兄ちゃん、弟を助けてくれて、ありがとう。」

と言う、母の目からも、なみだがこぼれていました。それから、弟には、

「ぜったい、とび出したらだめよ。」

と、きびしく、そして、やさしく、言いました。弟も、こつくりとうなずきました。

もし、あのとき、兄に助けてもらわなかったら、かわいい弟は、どうなったでしょうか……。そんなことを思うと、わ

たしは、ぞっとします。

わたしの家は、外に出ると、すぐ、大きな車が通っています。わたしは、まだ小さい弟にもくり返し、

「車が来たら、大へん。よく見るとび出したらいけんよ。」と、注意するようになりました。

そして、こんなことがあつてから、道路に出るときは、今まで以上に、左右をたしかめるようになりました。

また、わたしは、そのあぶない道を通つて、バスで、学校に通つています。兄が、はん長で、みんなを守つてくれます。いつも、先頭を歩きながら、真つ先に、左右をたしかめています。「ピーツ。」

と、ふえをふき、横だんきで、わたしたちが安全にわたれるよう、いつも気をつけてくれています。

その学校へ通っている道には、しん号きが一か所あります。そこは、この辺では、一番車がたくさん通つていて、とくに、気をつけるところです。だから、しん号をしつかりたしかめて、自分でも、車が来ていないか、よく見て、横だん歩道をわたります。時には、ものすごいスピードで、ピューツと、走り去る車もいます。何回も、ひやつとしたことがあります。

四月の交通安全教室では、ここまで来て、おまわりさんにも、横だん歩道のわたりかたを教えてくださいました。

「はん長さん、もつとしつかりふえをふいて、はたも、高く上げて、みんなに知らせて。」

と、一人一人に、真けんに教えていただきました。

わたしは、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、地いきの人

たち、それに、先生やおまわりさん、見守りたいの人たちと、大ぜいの人たちに、命を守っていただいています。

これからも、まわりの人たちには、「おはようございます」「さようなら」などと、大きな声のあいさつで、感しやの気持ちをつたえたいと、思います。

でも、一番大切なことは、とうとい命を、まずは、自分でしっかり守ることです。

そして、ぜったいに、事ここにあわないようにと、こころにちかいます。また、自分で、「とび出さない」という、自分へのブレーキをかけ、一つだけの、大切な命を守っていきます。



## ありがとうおばあちゃん

西条市立大町小学校

四年 奥平 絢女

おくだいら あやめ

「ここは、せまい道から出るところ。よく事故がおきているからあぶない場所だね。」

家の近い友達といっしょに、通学路を調べて、安全マップを作り始めました。いつも通っている道なのに、よく調べてみると、そこには、いろいろな安全を守るためのくふうがたくさんあることに気づきました。

ストップマークや止まれのひょうしき、ガードレールや横断歩道、カーブミラーは、周りの様子がよくわかって、いつもあたり前のように使っていました。でも、そこでは、よく事故が起きたり、あぶない思いをした友達もたくさんいます。なぜ、起きてしまうのでしょうか。

私は、交通ルールがあるのに、自分はだじょうぶとか、守っていると注意をせずに安心してしまっていることがいけないと思います。自分のことだけでなく、もしかしたら、と周りや人のことを考えながら、交通ルールを守っていく心が大切だと思います。もし、ルールがなかったらどうでしょう。毎日事故が起こったり、渋滞になったりして、安全なくらいができなくなってしまう。

私は、道をわたる時、右左右をしっかりと見たり、止まれと書いてあると止まったりして、きちんとルールを守っています。なぜかという、そうしないと、いつ自分がきけんな目

に合うか分からないので、自分で自分を守っています。小さい頃は、家族や地域の人、警察にも守ってもらっていますが、大きくなるにつれて、自分の交通安全の心は、人の命も大切にすることにつながるからです。

前に、おばあちゃんと自転車で買い物に行く途中にある横断歩道での話です。私は、いつも自転車に乗ったままで通っているけど、おばあちゃんは自転車を降りて通っています。

「なぜ、そうするの？」  
と聞くと、

「歩行者優先だからだよ。」

と教えてくれました。同じわたるための横断歩道でも、そこは何のためにあるのか、自分はどうしたらいいか考えて、自転車を止めてわたっているおばあちゃんを見習いたいです。

今では、小学生も中学生も高校生も、みんなが自転車に乗る時は、ヘルメットをかぶります。私の兄ちゃんは、中学生と高校生です。二人とも、ヘルメットをかぶっています。なぜかという、やわらかい脳を骨とヘルメットで二重に守るためです。もし、事故が起きても、脳や命を傷つけなくてすむからです。兄ちゃんがかぶって登下校しているのを見て、私もちゃんとあごひもをたしかめて、自転車に乗るようになりました。

私の自転車は、まだ新しいです。傷つけないように、事故にあわないように、家族で点検したり、塀で死角になっている場所は、カーブミラーでちゃんと見たりしています。おばあちゃんが示してくれた優しい心を大切に、もっと多くの交通ルールを正しく知って、安全な生活をしていきます。

## 命と交通安全

東温市立拝志小学校

五年

蚊帳

日沙希

かちよう

ひさき

犬と衝突。これは、母から聞いた話です。私が小さかったころ、母は、拝志小学校付近の交差点で仕事に行く途中、犬と衝突しました。車道の信号は赤。母の車が一番先頭で、止まりました。横断歩道の信号は青。小学生たちがわたり切りました。車道の信号がまもなく青になり、母は、走り出しました。ドーン。犬が歩道から飛び出してきたのです。犬は、そのまま走り去りました。母は、飼い主の家をたずね、あやまりました。幸い犬はけがをしていませんでした。

犬でも人間でも事故になると、両方つらい思いをします。もし、車のスピードが出ていたら、犬は、死んでいたかもしれません。また犬ではなく、車どうしの衝突だったら、と考えるとぞっとします。防げるはずの事故で大切な命を落とす人がたくさんいます。

自分のため、みんなのために、まもっていかなければならぬことがあります。

まず一つ目は、「ながら運転をしない。」ことです。「ながら運転」は、事故への近道になっています。二つ目は、「信号無視をしない。」ことです。たびたび信号無視をする人を見かけます。スピードを出しすぎて信号無視をする人を見るとはらはらします。三つ目は、「ルールに反する前に、人の事や自分のこと、みんなのことを考えてほしい。」ということなのです。

私は、学校の自転車教室で、自転車の点検の仕方を教えていただいたり、左右の確認の仕方、横断歩道の渡り方などを学んだりしました。

自転車の乗り始めにふらふらして危なかったので、道路に出たときは、気をつけたいです。

また、自転車の点検をかかさずにしたたり、ヘルメットをかぶったりして、安全に運転したいです。母は、私が自転車に乗る前に、

「ヘルメットかぶった？」と声をかけてくれます。

登下校では、毎日、交代で私たちを見守ってくれている見守り隊の方たちに感謝したいです。見守り隊の方は、横断歩道を安全にわたっているか見とどけてくれます。「おはようございます。」とあいさつをするとあいさつを返してくれたら、手を振ってくれたりします。「今日も安全に登下校しよう。」と思います。

将来、私も大人になったらめんきよをとるつもりです。交通安全教室や自転車教室について学んだことに気をつけて運転したいです。自分の事、みんなの事を心にとめておき、交通事故で命を落とすことのないようにしたいです。命は一つ！事故<sup>セロ</sup>0で守っていいこうという事を大人になっても約束します。

## 事故から学んだこと

内子町立内子小学校

五年 土井 七海 どい ななみ

一年生の時の帰り道。わたしは、友達といっしょに楽しく話をしながら、学校のげん関を出ました。ふと時計を見ると、バスの時間まであと一分しかありません。びっくりしました。間に合いません。ほかのバス通の子たちを探していると、近くにいた友達が、

「さっき、行きよったよ。」

と教えてくれました。大いそぎでバス停まで走りました。バス停までの道が遠く感じました。あともう少しあともう少しと思つて四つ角のところまで左右を見て渡ろうとしたしゅん間、右側から車が来ました。

気がついた時は、わたしのくつだけがびりびりになって、車とタイヤの間に、はさまっていました。近くの家の友達のお母さんが、車のブレーキ音をきいて出てきました。大あわてで出て来て、私をだっこしてだきしめてくれたことを、今でもはっきり覚えています。近所のおばさんたちも集まってきた、大さわぎになったことも覚えています。大勢のおとなの「だいじょうぶ。だいじょうぶ。」という声を聞いて、わたしは大変なことになったんだと感じました。

その後、祖父が車でかけつけてくれました。

「そんなに大声で泣けるんなら、たいしたことないじゃろ。」

という祖父の言葉を聞いて、わたしは悲しくなりましたが、今思うとわたしを安心させようと思つて言つてくれたことがよくわかりました。その後、学校の先生、大勢の友達、けい察官、きゆう急車……とどんどん人が増えてきました。血が出ている足をタオルでおさえてもらつて、きゆう急車に乗りこみました。

病院では、祖母と母がまっています。母は、わたしが事故にあつたことを聞いて、心配しすぎて車の運転ができない状態だったので、仕事がいっしょの方に連れてきてもらったのだそうです。目が真っ赤になつていて、本当に心配だつたことがよくわかりました。検査をすると、右足の骨が折れていました。ギプスをつけましたが、いたくていたくて歩くことはできませんでした。少したつと、自分で歩けるよう松葉づえの練習を始めました。初めてだったので、うでがいたくなつたり、ついつい足を床について、いたかつたりしました。お風呂に入るのもトイレに行くのも、とても不便でつらい日々でした。そして、二か月かかつてやつと治つた時は、足も気もちもとても軽くなりました。交通事故にもう二度とあわないよう、ルールをしっかり守ろうとちかいました。

事故ではないけれど、三年生の時に階დანから落ちて足のじんたいがのびてしまったこともあります。一年生の時と同じように、トイレもおんぶをして連れていってもらつていました。運動会が近いのに、練習は全て見学でした。本番はどうしても出たいと思つていたので、みんながおどっているダンスを一生懸命見て覚えました。赤白リレーの選手にも選ばれており、早く治すぞという気もちでいっぱいでした。当日

はどうにか出ることができましたが、まだ足がいたくて十分な力を出し切ることができませんでした。

わたしは、二回も足をけがしたことで学んだことがあります。わたしのちよつとした不注意で、いたくしんどい日々が続くこと。また、周りの人に多大な心配やめいわくをかけること。一年生の時の交通事故は、足のけがだけで済みましたが、もし命にかかわるようなけがであればもっと大変なことになつていたでしょう。母に、

「わたしが事故にあつたことを聞いた時、どんな気もちやつた。」

と聞くと、

「七海が死んだらどうしよう。」

と頭の中が真っ白になつたと言っていました。大好きな母にもう心配はかけたくないとおもいました。そして、学んだことは、もう一つ。わたしには、楽しみにしていることや、やりたいことが山のようにあります。それを一しゅんの事故で、あきらめないといけないことになるかもしれないということです。大すきなピアノをひくことや陸上練習で走ることができなくなるかもしれないということです。もう二度と事故にあうことのないよう、落ちついて安全確にんができるよう、時間によゆうをもつた行動をとりたいと思います。

# 交通事故<sup>ゼロ</sup>のために

西条市立西条小学校

六年 **國田** くにた **未望瑠** みのり

「ドンツ」それは、雨の日でした。私は、いっしゅん何が起きたのか、まったく分かりませんでした。その時、運転していたお父さんの、

「あたってきた人、こっちに来る。」

という一言で、私はこれは事故なんだと気がつきました。そのあたってきた人が来る時、その手には、タイヤのホイールを持っていました。お父さんが車から出て、その人と話している時に、いきなり妹が泣き始めました。どうしたのかなと思ったら、妹が、

「頭が痛い。」

と言って、お母さんが、

「私の肩にあたった。」

と言っていました。私もその時、車があたったしょうげきで車がかたむいて、ドアでこしを打ったので、すごくいたかったです。

その後、お父さんが警察を呼んだり、私たち家族は病院に行ったり、事故の後いろいろなことをしました。その日から何年かたったけれど、助手席で寝ていた弟でさえ、今も頭が痛かったり首が痛かったりします。また、今でも事故の時のこわい記おくが残っています。一しゅんにして大きなけがに

つながってしまふ事故はこわいです。この事故の時のような雨の日は、特に気をつけなければならぬと思いました。

学校の交通安全教室で、警察の方から、子どもの自転車の事故が多いということを聞きました。私が弟といっしょに自転車で学校に行っている中、車が来ていなかったので、弟は道路を渡ろうとしていました。すると、すごいスピードで車が弟の自転車のすれすれを通っていきました。その時、弟は、

「あの車、危ない！」

と言いました。でも私は、弟のこの一言に納得がいきませんでした。それは、スピードを出していた車は危険だけれど、きちんと確かめをせず道路に飛び出した弟も悪いと思っただけです。この時は、事故にならずにすんだけれど、もし、あの時車とぶつかっていたら、弟は大けがをしていたかもしれせん。命を失っていたかもしれせん。

先生や親たち大人は、いつも「右、左、右を見る」や「ヘルメットをかぶる」ということを私たちに言っています。この言葉に大切な意味があるということを、この時、改めて感じました。

私の家のすぐ前には、交通量の多い道路があります。自転車や車、バイクなどいろいろな乗り物が通っています。大切な命を守るために、私は自転車に乗るときは、必ずヘルメットをかぶります。また、交差点では、いったん止まって右、左、右を確認するようにしています。道路を渡るとき、相手が止まってくれるだろうか、ぱっと見て車がいらないから大じょうぶだろうという考えではなく、自分自身の目や耳など

をしつかり使って、安全を確かめることが大切だと思います。そして、乗り物に乗る時は、便利だけれど危険なことも引き起こすこわい物だと感じながら乗ることが「交通安全」につながると思います。車を運転するお父さんやお母さんには、スピードを出しすぎないようにしてほしいです。近くに家があつて誰かが飛び出して来そうな所や、細い道では、特に気をつけてもらいたいです。私や弟、妹がいつしよに車に乗っているときは、運転しているお父さんやお母さんに後ろから呼びかけ、よそ見をさせることがないようにしたいと思います。

自転車が事故を引き起こすことも考えられます。自転車に乗る場合も車と同じで、スピードを出しすぎないようにしたいです。自分があわてていると、ついついスピードを出してしまいがちになるので、時間には余裕をもつて行動することが大切です。常に歩行者など相手の気持ちを考えながら自転車に乗ることを心がけたいです。

また、交通安全教室で、自転車点検の大切さも教わりました。安全に運転できるよう、普段からハンドルやブレーキ、タイヤ、ライトなど、自分の自転車をきちんと点検し整備しておきたいと思います。

たった一つしかない大切な命を、私は自分自身でしっかりと守っていきます。また、事故のこわい経験があるからこそ、家族や友達などまわりのみんなにも、交通ルールを守ることが大切さを呼びかけていきたいです。

## 命を守るヘルメット

今治市立常盤小学校

六年

たなか  
田中 一期

「ガシャン」  
大きな音が鳴りひびく。ぼくは少しめまいがして、背中に痛みを感じた。ゆっくりと起き上がってふりかえると、ぼくの自転車が車の下じきになっていた。

ぼくは、野球の練習に行く前に、友達の家が営んでいるうどん屋に昼ごはんを食べに行く約束をしていた。約束の時間に間に合いそうにない。ぼくは少し急いだ。そのため近道の曲がり角をカーブミラーを見ないで曲がってしまった。その時、事故は起きた。体のきずは軽かったので、治るまでに時間はかからなかった。しかし、心のきずはすぐには治らなかつた。曲がり角に近づくところわくわくしたり、フラッシュバックのように少しめまいがしたりすることがあった。今では、交通安全教室などで繰り返し学んだことで、きょうふ心もなくなり、安全に曲がり角をまがることができている。

事故の後、しばらくしてヘルメットを見た時、ぼくはきずがいつぱいあることにおどろいた。そのきずの多さが事故のしよげきの強さも物語っていた。ぼくの頭を、命をヘルメットが守ってくれたことを痛感した。そして、ヘルメットの大切さを改めて理解した。だから、それからのぼくは、自転車に乗る時には必ずヘルメットをかぶり、しっかりとあごひもをかけるようにしている。

ある日、友達がヘルメットをかぶらないで自転車に乗ろうとした。

「ノーヘルはだめよ。」

と声をかけたほくに、友達は、

「いいんよ。バレへんけん。」

と言ってきた。ほくは、友達の「バレないから。」という理由にびっくりした。確かに、学校のきまりに、「自転車に乗る時には必ずヘルメットをかぶること」とある。しかし、きまりというよりも、自分の命を守るためにすべきことだと僕は思う。

今、愛媛県では、サイクリングが「健康」と「生きがい」と「友情」を与えてくれるという「自転車新文化」を提唱し、瀬戸内しまなみ海道を中心としたサイクリングパラダイスを目指す「愛媛マルゴト自転車道」を推進している。そのため、高校生もヘルメットをかぶって通学することになった。ほくはとてもいいことだと思う。誰もが当たり前のように、自転車に乗るときにはヘルメットをかぶる世の中になっていってほしいと思う。そのために、ヘルメットをかぶらない友達が、「いいんよ。バレへんけん。」と言った時には、

「自分の命を守るためにかぶろや。」

と注意したい。そして、ヘルメットをかぶることが当たり前の世の中に向けて、協力していきたい。

## みんなで取り組む交通安全

伊予市立南山崎小学校

六年

たかいし  
高石 愛莉  
あいり

わたしは、国によって交通ルールがちがうと聞いておどろきました。例えば、車が優先の国もあれば、歩行者が優先の国もあるそうです。あるのが当然だと思っていた信号機がなく、自分で判断してわたらないといけないなど国によって様々です。

わたしは、車と歩行者ではどちらを優先するべきか考えてみました。そうすると、どちらも平等に考えるべきだと気付きました。車という機械を動かしているのも人。横断歩道をわたるのも人。両方同じ人間です。優先されているという意識をもちすぎずに、運転手も横断歩道をわたる人も、どちらも気が付けないといけないと思います。

交通事故でたった一つの命を落としてしまうのは、とてもつらく、その家族もとても悲しいです。みなさんにも頼もしい家族がいますね。その家族が車にはねられたり、その現場を目撃してしまったら、どうしますか。多分頭が混乱し、何も考えられないと思います。ただ「うそだ、うそだ。」と信じられないでいるでしょう。それは、家族を愛しているからです。私たちや家族が交通事故にあわないように、交通安全に気を付けなければなりません。

では、「交通安全に気を付ける」とはどんな意味なのでしょう。「交通安全」という言葉を改めて調べてみました。交通安全

全とは、みんなが交通規則を守り、交通事故が起こらないようにすることです。

わたしたちの学校では、事故防止のためにいくつか取り組んでいることがあります。一つ目は、班旗の使い方です。登校するときには、通学班の班長が車から、通学班のみんながはっきりと見えるように横断歩道で旗をふります。二つ目は、お礼の態度です。車を止めて「お先にどうぞ」とゆずってくれる人に対し、「ありがとうございます。」と声に出してわたります。声が届かなくても、わたり終えたら運転席へ体を向けて、頭を下げることでお礼の気持ちを表します。しっかりと態度で示すことで、運転手が気持ちよくゆずってくれます。三つ目は、「交通安全三つのちかい」です。集団下校のとき、次のことをみんなで言い、守りながら帰ります。

一、 道路で遊びません。

二、 飛び出しをしません。

三、 自転車に正しく乗ります。

これ続けることで、少しでも自分の気を引きしめることができると思います。

わたしは、これを他の学校でもやってほしいです。幼稚園、保育所、小学校、中学校、高校、大学、社会人にも交通安全の取組を一つでもいいのでしてほしいです。それが大切な大切な命を守るにつながります。

毎日、事故や自然災害、紛争や殺人事件など様々なニュースを目にします。その中でも何よりわたしが嫌なのは、交通事故で人が死ぬということです。きちんとルールを守るか守らないかで、事故を引き起こすか防ぐかが分かれるからです。



「忙しくて仕事に間に合わない。」「スピードを出しすぎて急ブレーキをかけた。」こんな経験はありませんか。時間も仕事もそんなに大切ですか。何より大切なのは命です。出かける前日にしっかりと準備すればいいし、早く起きればすむことです。ちよつとした心のゆるみや油断が事故につながります。だから、わたしは大人に対しても、かけがえのない命を大切にしようと呼びかけたいし、それがわたしの願いです。

# 私の交通安全

大洲市立喜多小学校

六年

神野 莉穂

「大丈夫?ごめんね。」

心配そうに声をかけるおぼさんと、あわててかけつけたお母さんを見て、

「大丈夫です。ちょっとすりむいただけ。」

そう言つて、ドキドキが止まらず、ふらふらする体で、ゆっくり起き上がった。

あれはまだ四年生のときだった。お母さんについて自転車で走っていて、安全確認もしないで交差点で飛び出し、ちがう方向から来た自転車とぶつかってしまった。そのひょうしに私は、自転車ごと転んでしまったのだ。自転車同士だったから、かすりきずですんだけど、もし相手がバイクや自動車だったら、大けがをしていたかもしれないし、命が危なかったかもしれない。反対に、小さい子やお年寄りにぶつかっていたら、相手の人に大けがをさせたり、命をうばったりしたかもしれないと思うと、おそろしくなる。その交差点は、人通りが少なく、いつも安全だったから、止まって確認せずに飛び出してしまった。人通りが少ないとか、いつも安全だからという油断から、大変な事故になるところだった。

その話をしていると、妹も自転車で事故になりそうだったときのことを教えてくれた。妹は、自転車で走っている時、よそ見をしていて田んぼの中に自転車ごと飛びこんでしまっ

たというのだ。自分は田んぼから上がれたけれど、自転車が重くて田んぼから出せないでいると、近くにいたおぼさんが自転車を引き上げてくれたそうだ。大きなけがもなく、服や自転車がよごれただけですんだが、よそ見をしていて自動車にぶつかっていたら……。私も妹も、一歩まちがえば大変なことになるところだった。

自転車に乗ると、早くて楽に移動ができ、とても便利だ。私たち小学生にとっては、なくてはならない乗り物だ。でも、ルールを守らなかつたり、危険な乗り方をする、大けがや命を失うような事故につながってしまう、とても危険な乗り物でもある。私たちの学校では、命を守るために、自転車の決まりが三つある。一つ目は、自転車に乗る時は、ヘルメットをかぶる。二つ目は、国道では自転車に乗らないでおして歩く。三つ目は、夕方六時以こうは、子どもだけで自転車に乗らないというルールだ。ヘルメットは、暑くてきゅうくつだし、かみがくしゃくしゃになるから、正直かぶりたくない。国道を通る方が近くて便利な時があるし、六時以こうだって、まだ明るくて自転車の方がだんぜんいい。だけど、「命と便利さ、どっちを取りますか。」と聞かれたら、絶対「命」と答えるだろう。だから、面倒でも不便でも、自分の命を守るために、ルールを守ろうと思う。

私は、今、登校班の班長をしている。私の班は十人で、一年生はいないけど、ちょっと心配な二年生がいる。なぜかという、通学路には、横断歩道や信号機、交通量の多い国道もあって、とても危険なのだ。それなのに、よそ見をしたり、ほかの班の子としゃべったり、間をあけてのろのろ歩いたり、

間をつめようとして走ったりするからだ。近くの学校では、集団登校中、信号が青になって横断歩道を渡っていたところへ、乗用車がつっこんで来るという事故が起こったそうだ。先生から、「車は急には止まれないから、信号が青になっても、きちんと左右の安全を確認することが大切。」と教えてもらった。班長は、班のみんなの安全を守る責任がある。自分だけでなく、班のみんなの安全のためにも、これまで以上に安全確認をしないといけないと思った。

私の通学路では、毎朝、国道を横断するところや学校前の交差点で、先生方や地域の方が登校指導をしてくださっている。安全協会の方やパトロールのおまわりさんにも会う。地域みんな、交通安全のためにいろいろな活動をしてもらっている。交通事故は、子どもやお年寄り、歩行者も運転者も、自転車でも、バイクや自動車でも、みんなを不幸にする。まずは、自分から、交通ルールをしっかり守り、事故を起こしたりまき込まれたりしないように気を付けたい。「自分の命は自分で守る」を、安全確認や交通ルールを守ることから始めたい。



## 【中学生の部】

### 家族を悲しませない

今治市立大島中学校

一年 関 陽芽子

私のお母さんは、車に乗るとすぐに、「シートベルトをして！」という言葉を私達にかけます。

つい忘れてしまうと、ものすごく怒って、車を止められます。

私は、自転車のことでも、よく注意をされます。

今度は、父の言葉が強い口調で飛んできます。「ヘルメットかぶっていけよ！車に気をつけて、飛び出しするなよ」と、ガミガミ言ってきます。

小さい時から、いつも出かける時は、玄関先で、「いつてらっしゃい」の後に、その言葉が続いてきてるので、頭には入ってるつもりでも、中学生になると、反対に「ヘルメットかぶると恥ずかしい」とか「髪型がくずれてしまう」と思って、小学生の時よりも、かぶらなくなりました。

でも、最近そんな私を見つめ直す機会がありました。

「飛び出し注意」の場所で、私は、右左をあまり確認せず、自転車で飛び出してしまいました。

そして、車に、衝突されそうになったのです。心臓が、飛び出るほどびっくりしました。

車の運転者の方に何度も、何度も、頭を下げ、「すいませんでした」と言うのが、精一杯でした。

それからは、しばらくポーツとしてしまいました。

「周りを確認する」

「夜は、自転車で出かけない」

「一時停止は必ずする」

など、それまで意識してなかったことに、人一倍注意するようになりました。

車を運転し、人や自転車にぶつかってしまった場合、運転者の方が悪いと思う。

でも、私達歩行者や、自転車に乗っている者も、注意して行動すれば、少しでも交通事故は、なくなっていくと思えます。

私たちは、便利さと引替えに交通事故の恐怖と、いつも隣り合わせで生きているのだと思います。そして、車が来ないからと、赤信号なのに横断してしまったことなど、今までの行動を素直に反省し、交通ルールを絶対に守ることの大切さを感じています。

たった一つしかない命を自分で、守るという事に、つながるのです。

家族を悲しませる大ケガや、障害を負ったりしないように……。

夏休みに、入ってから、毎日交通事故のニュースが流れています。

原因は、「スピード違反」や「飲酒運転」や「運転者のわき見運転」など、交通事故は、人の心がけや気持ちの持ち方で、

未然に防げると思っています。

だから、そのために努力する事が、何よりも、大切なことだと思えます。

日常の生活の中で、小さい子供やお年寄りをいたわる気持ちを持つことで、社会全体に思いやりの心が育っていけば、交通ルールも自然に、守られていくに違いありません。

そして、その事を将来、みんなに伝えていくことが、これから大人になっていく、私達の務めだと思います。

そして、交通安全という四文字の言葉には、たくさん思いや、願いが込められている言葉だと思います。

自分の身は、自分で守る！

命は、どんなにお金を払っても、戻ってはきません。

一つしかないのです。

一人一人が、交通安全に気を配り実際に、行動していくことで、事故を未然に防ぐことができるのです。

明日からは、五分早く家を出ることにします。

時間にゆとりがあれば、心にもゆとりが持て、周りにも気をつけることができます。

マナーはきちんと守っていききたいと思えます。



## 交通安全について考える

松山市立三津浜中学校

一年 中平 大介

ぼくは将来プロのサッカー選手になりたいと考えています。そのため少しでも強くて優秀な指導者の方がいるサッカーチームを求めて、南予の愛南町から親元を離れてこの松山市に移り住んできました。

ぼくは、下宿先からサッカーの練習場まで自転車に乗って通っています。家から練習場までは自転車です。三十分程度かかります。行くときはあまり国道を通らず細い道を通っています。その方が近道になるからです。

ただ、あせっていてあまり周りを見ないため、飛び出しそうになるときがあります。スピードを出しすぎたり、信号が赤に変わるぎりぎりの瞬間に横断歩道を渡ったりと、あせっていると危ないことがとても多いです。友達が車にひかれそうになるのを見ることがも少なくありません。

今はまだ明るいですが、冬になると道が暗くなっていきます。特にサッカーの練習が終わった帰りなどは真っ暗です。しかも、帰り道にはあまり照明がありません。そういう場所を、少しでも早く帰ろうという思いで自転車をこいでいます。帰り道では、みんな練習でへとへとに疲れていて、眠たい状態で自転車に乗っています。ぼくは一度、とても眠たい状態でうとうとしながら自転車をこいでいて、水路に落ちかけたことがあります。同じような状態で自転車をこいでいた友達も、みんなに置いて行かれて道に迷ったこともありました。

松山市では、ここ数年間で自転車事故が多く発生しています。自転車に乗っている高校生が二人、車と接触して死亡したというニュースがありました。二人ともヘルメットを着用していなかったそうです。この死亡事故をきっかけにして、高校生の自転車ヘルメット着用が義務づけられ、愛媛県内のすべての県立高校の生徒にヘルメットが無償で配布されることになりました。

道路交通法によると、「十三才未満の児童又は幼児の保護者は、ヘルメットをかぶらせるよう努めなければならない」となっています。それに加えて愛媛県の条例では、「すべての自転車利用者がヘルメットを着用すること」を勧めています。この違いから、おそらく愛媛県は全国的にみても、高校生が起こす自転車事故の発生件数が多いのではないかと感じました。

昨年に愛媛県内で起きた自転車事故の件数を調べたところ、高校生の負傷者は一三九人となりました。高校生でもこんなに多いのだから、小学生や中学生のうちには、もしもの場合に備えてみんながヘルメットを着用し、一つでも死亡事故を減らすべきです。

ぼくの住んでいる三津浜地区では、小中学生がヘルメットをかぶらずに自転車に乗っています。以前住んでいた南予の愛南町では、小中学生が自転車に乗る際はヘルメットをかぶることが当たり前でした。そのようにみんながかぶるべきなのに、ヘルメットの着用率の低い松山市では、恥ずかしさがあつて着用することに抵抗を感じるのだと思います。自転車に乗るすべての人がヘルメットをかぶることが当たり前

世の中になるといいのですが、現実はそうではありません。県立高校生へのヘルメット無償配布が良いきっかけになればいいなと願っています。

ぼくの通っているサッカーチームでは、全体のおよそ七割近くの生徒が松山市内外から自転車です通っています。しかしヘルメットを着用している人は誰一人いません。まずはぼくから同じ下宿先のメンバーに呼びかけて、だんだんとヘルメットの着用を普及させていきたいと真剣に考えています。

自転車は、未成年でも遠くの場合へ簡単に移動できるし、石油などの燃料を使用しないので環境に優しい乗り物です。しかし、自転車の怖さを知らずにルールを守らない人が多いと、自転車事故はなくなると思いません。以前、のぼくもそんな考えの一人でした。事故を起こさないためにもルールを守り、周りをきちんと見ながら安全運転を今後とも心がけていこうと思います。そしてヘルメットを着用することも大きな事故を防ぐ大切な方法です。これからは、自転車に乗る人はみんなヘルメットを着用して安全運転を意識する世の中になっていくと思います。



# 私の願い

東温市立川内中学校

一年 小倉 詩絵里

私は、小学二年の時に交通事故にあいました。その事故で顔に傷を負い、とても怖い体験をしました。

事故にあったのは、祖母の家に遊びに行き、楽しいひとときを過ごして帰る途中の事でした。私と母が乗っていた車に、信号無視をした車がぶつかってきました。助手席に乗っていた私のところに相手の車が飛び込んできたのです。その瞬間、「ガッシャー」という音と共に窓ガラスはめちやくちやに割れ、車体はへこみ、シートには血がたくさん飛び散りました。あまりの出来事に、私は頭が真っ白になってしまいました。ふと気がつくと母の声がかかります。「血が出てる！大じょうぶ？」

その時私は、やっと自分が大変なケガをしていることに気づいたのです。その傷は、顔を十二針も縫う程の大きな傷で、その傷跡が今でも残っています。母は、懸命に血を止めようと手当をしてくれました。そんな中、相手の人から信じられない言葉が、聞こえてきました。「なんでお前のところは、信号無視しとんねん。」あまりの心ない言葉に、それまで我慢していた涙がどどとこぼれ落ちました。傷の痛みよりも相手に対する憤りでいっぱいになりました。私と母が青信号で通行したのは間違いありません。たまたまだったのですが、二人で「右、左、右、もう一度右を見て。」と言いつつ確認をしてから、発進したのをはっきり覚えていたからです。自分の過失をごまかそうと、けがをしている人に気づかれないように

ることなく一方的に罵声をあげている人に、私は心底腹が立ちました。

その後私は、近くの人の助けを借りて、病院に運ばれました。病院では、レントゲンをとったり止血をしてもらったりしました。先生は傷口からガラスの破片を取り出してくださいました。「こんなガラスの破片が顔につきささっていたのによくがんばったね。頭にガラスが当たらんかって、大出血せずにすんでよかったな。」と言われました。その時初めて、この事故の重大さを知ったのです。私は一歩まちがえると死に至ったのかもしれないという恐怖を感じました。事故の時、母の手がぱつと伸びてきて、私の頭を守ってくれたことを思い出しました。あの母の手がなければ、私は今、この世にいなかったかもしれない。そう思うと、母に感謝の気持ちでいっぱいになります。

病院での処置が終わると、警察の方が来て、事故の状況を教えてほしいと言われました。まずは、シートベルトをしていたかを聞かれました。私は、祖母と一緒にシートベルトとドアロックを確認したことを思い出しました。祖母は、私たちが帰る時、いつも見送りをしてくれます。その時必ず私に「シートベルトをして。」「ドアロックをして。」と言うのです。そのことをすっかり覚えていたので、胸を張って「シートベルトをしていました。」と答えることができました。警察の方は、「えらいね。ちゃんとしてたんだね。シートベルトは命を守る大切なものなんだもんね。」とほめてくださいました。私は祖母に感謝するとともに、シートベルトの大切さを再認識しました。この事故で、たくさんの人にお世話になったと思

っています。私に交通安全の大切さを教えてくださった警察の方々や、病院に連れて行ってくださった方の優しさを、大切に心に刻んでおきたいと思います。

私は、この事故を通じて、事故を体験したからこそ伝えたいことがあります。

一つ目は、信号をしつかり守ってほしいということです。赤はもちろん、黄色でも止まってください。そして、信号が変わったからといってすぐに発進するのではなく、もう一度確認してから発進してほしいということです。一人一人が気をつけることによって必ず事故は防げます。

二つ目は、自分の命、そして家族の命を守るためにも、シートベルトをつけてほしいということです。シートベルトはめんどくさいと思っているかもしれませんが、たった数秒あったらつけることができます。これだけのことで命が守られるのなら簡単なことなんです。まわりの家族にも声かけをして、必ずつけるようにしてほしいです。

三つ目は、みんなが優しい気持ちを持ち、ゆずりあい、また何かあったときには協力しあってほしいということです。

この三つがあれば、私はこの世の中から交通事故という言葉がなくなるのではないかと思います。「安全チェック」と「声かけ」を合言葉に、これからも気をつけて生活していこうと思います。自分の命、家族の命、そして世の中のすべての大切な命を守っていききたい、これが私の願いです。

## お世話をしてくれたひいばあちゃん

東温市立重信中学校

一年 今井 愛佳

私の家族は笑顔いっぱい、みんなおもしろい。家族みんな仕事していたため、私は幼稚園のころ毎日ひいばあちゃんが幼稚園バスにお迎えにきてくれた。歩いて動物園やお買い物に連れて行ってくれたりして、ひいばあちゃんの家で過ごしていた。そんな家族から笑顔が消えたのは、今でもわすれることのできない去年の十二月二十三日のことだった。

その日、私は愛媛こども新聞グランプリの表彰式があった。夜みんながおいわいしてくれ、とても楽しく過ごしていた。

そんな時、おばあちゃんの携帯に一本の電話があった。話をしていておばあちゃんの顔が真っ青になり、周囲の雰囲気が一変した。それは、ひいばあちゃんが事故にあり、救急車で病院に運ばれたという一報であった。おばあちゃんとおばあちゃんが病院に行き、私たち家族は火の気がないか確認をするため、一人暮らしをしていたひいばあちゃんの家に行った。向かっている途中、『ひいばあちゃんの命があぶないかもしれない』という電話があった。私たちは急いでひいばあちゃんの家に向かった。家の近くで事故にあったので、警察の人がライトをつけ、現場検証をしていた。ひいばあちゃんの家に着くと、テレビ局の人が行ききしていた。お父さんは、「絶対に出たらいかんよ。」

と言って、一人で家に入った。しばらくして、お父さんが家から出てきた。そのとき、悲しい顔をしていた。ひいばあちゃんが亡くなったという知らせがお父さんの携帯にあったら

しく、すぐに私にもそのことがわかった。そしてもう一つ、ひいばあちゃんがひき逃げにあったという事実も知らされた。

二日後の夕方、ひいばあちゃんは七十年間過ごした家にとんと帰ってきた。でも、いつも笑顔で迎えてくれていた元気で明るい、私の大好きなひいばあちゃんの姿ではなかった。青アザだらけでむくみがあり、顔以外には包帯が巻かれて病衣が着せられていた。私の妹は変わり果てたひいばあちゃんの顔を見て、「怖い、怖い」と大泣きし、二度とひいばあちゃんの近くに寄っていかうともしなかった。その後、事故の詳細もはっきりしてきた。細い道を足の悪いひいばあちゃんはシルバーカーを押しながら買い物をして帰っている時、猛スピードで走ってくる車に家一軒分飛ばされたという。その道は、いつもひいばあちゃんが幼稚園の時、お迎えに来てくれた道でもあった。そして、その日からおばあちゃんの笑顔が消えてしまった。おばあちゃんには、ひいばあちゃんの死を受け入れず一人になることもできなくなった。そして毎日、「どうして？」と自分を責めていた。そんなおばあちゃんの姿を見るのも悲しく、ただ毎日一緒に過ごすことができなかった。

交通事故でも、人の命を奪えばそれは被害者にとつては殺人です。だから私は、ひいばあちゃんと家族から笑顔をとつた加害者を許せなかった。この事故で一秒前までは幸せだった家族から、笑顔を奪ってしまった。そしてほんの一瞬の心のゆるみや不注意で多くの人の人生を奪ってしまった。

交通事故は、加害者も被害者、そして家族みんなを不幸にすることがわかった。

私は毎週、ひいばあちゃんの家にお線香をあげに行く。そこで、今日の出来事や幼稚園のころの感謝の気持ちを伝える。いつもひいばあちゃんは私たちが帰る時「何も無いなあ。また来てなあ。」と言い、車が見えなくなるまで笑顔で手を振りつづけ、見送ってくれていた。その姿は今でも忘れられない。

私も中学生になり、自転車通学になった。今まで以上に危ないなと思うことがある。少しの大きな道では、トラックの通行が多く、信号が黄色や赤色でもスピードを出して通行する、その為、横断歩道の信号が青でもすぐに渡れないことがある。その他にも、指示器を出さず曲がる車もある。私の身の回りです、何があってもおかしくない状態だ。

今、四歳の妹は交通ルールを学んでいる。道路の交差点では、きちんと止まって、

「右みて、左みて、もう一度右みて」と声を出して言っている。四歳の妹でもあの日のことはいまでも忘れていない。

私も幼いころから社会の一員として交通ルールを学び、それを実践している。それは、一生涯守らなければいけないルールである。初心を忘れず小さなことの積み重ねをみんなが守ることで、より安全に交通事故がなくなるのではないかと去年のあの悲劇から学んだ。今、やっと家族にも笑顔を取り戻してきた。私は亡くなったひいばあちゃんの

為にも、交通安全を深く理解し、もう二度と同じことが繰り返されぬ様に切に願う。



## 命を守るヘルメット

八幡浜市立愛宕中学校

一年 橋田 佳奈

「携帯電話がつかまらない。」

「どうしたの？」

「何があったの、お母さん！」

約束の時間を過ぎてても、母は帰ってきませんでした。母に何があったのか心配で、不安な気持ちでいっぱいになった、昨年の父の日の出来事です。

母は農作業の帰り道に、バイクで転倒してしまいました。すぐに入院し、顔面骨折の手術を受けるという大きな交通事故故にあつてしまったのです。頭を強く打ち、一時は意識を失っていた母ですが、幸運にも命に別条はなく、家族みんなで胸をなでおろしたことを、今でもはつきりと覚えています。

病室で横になっている母の顔や手足には、複数の傷がありました。また、衝撃の強さを示すように顔中がはれていました。痛そうにベッドに寝ている母の姿を見て、私は涙が止まりませんでした。

母は、私に「ヘルメットのおかげだね。」と言ってほほ笑んでくれました。その時初めて、「ヘルメットが母の命を守ってくれたのだ。」と気づき、ヘルメットへの感謝の気持ちがわいてきました。

普段、何気なく着用していたヘルメット。「かっこ悪いし、髪型がくずれるから、かぶるのはいやだな。」と思っていたヘルメット。しかし、母の一言で、そんな気持ちでかぶっていた自分はずかしく、情けなくなりました。「これからは、い

つもありがとうという感謝の気持ちを忘れないで、しっかりと着用していこう。」と思うようになりました。そして、私自身の交通安全に対する意識も少しずつ変わっていきました。

中学校に入学して、五月には交通安全教室がありました。自転車点検を受け、自転車の練習を行いました。自転車は身近で便利な乗り物ですが、事故に対してはとても無防備な乗り物でもあります。自転車を快適に、安全に利用するために大切なことを学びました。一つ目は、正しくヘルメットを着用することです。二つ目は、交差点では一時停止をすることです。三つ目は、青信号であっても、周囲の状況に細心の注意を払って走行することです。最後に、歩行者の近くを通る時は、歩行者を優先し、徐行することです。私は、この交通安全教室で、周囲の状況から事故の危険性を読み取り、危険を遠ざける注意力がとても大切だと学びました。

今年の七月には、愛媛県内の県立高校生のヘルメットの着用義務化がスタートしました。通学時にすれ違う高校生は、みんなきちんヘルメットを着用しています。ヘルメットは、交通事故の頭部へのけがを防いでくれます。それだけではなく、ヘルメットの着用によって、一人一人の交通安全の意識が高まり、自転車の運転マナーが向上していくことも期待できると思っています。今後は、高校生にとどまらず、自転車に乗るすべての人がヘルメットを着用することで、万が一の事故に備え、自らの命を大切に守ってほしいと思います。

テレビでは、毎日のように交通事故のニュースが流れています。その原因の多くは、スピードの出し過ぎ、飲酒運転等の運転者の不注意によるものです。しかし、このような事故

は、運転者の心がけや思いやり一つで防ぐことができると思っています。今の私にできることは、「交通ルールを絶対に守ること」です。これは、当たり前のことですが、この当たり前前かが、考え事や携帯電話などの「ながら運転」のために守れなくなつて、事故という結果につながっているのだと思います。事故が起きてから反省しても遅いのです。

交通事故は、被害者と加害者のどちらにとっても何一つ良いことはありません。本人だけでなく、家族や友達も悲しませることになります。被害者にも加害者にもならないために、これからは、自転車に乗っている時はもちろん、歩いている時も、交通安全に気を配り、交通ルールの遵守を実践していこうと思います。そして、自転車に乗る時は、必ずヘルメットを着用し、一つしかない命を大切にしていきたいと思えます。

母の交通事故はショックな出来事でしたが、私に交通安全と命の大切さについて考える機会を与えてくれました。そして、ヘルメット着用の大切さも教えてもらいました。あれから、家族で交通安全について話し合うことが増えました。母の事故をむだにしないためにも、これからも交通安全について家族で話し合いを続けていこうと思います。このような話し合いがどの家庭でも行われ、交通安全の意識が高まれば、交通事故のない、安心して暮らせる町になると私は思います。

## 無駄な事故を減らすために

西条市立西条北中学校

二年 矢野 彩都美

先日、少し「ヒヤッ」とする出来事があった。

私は、母が運転する車で、習い事に行っていた。私の家の近くには、交通量がとても多い狭い道がある。車二台がぎりぎりすれ違えるくらいの道だ。ちょうど、その道と当たるT字路を曲がろうとして、一時停止をしていた時のことだ。「プップー」と、母がクラクションを鳴らした。高校生くらいだったろうか。男の人が自転車でも一度も止まらずにそのままの速度で走って来たのだ。とても急なことであった。そして、何よりも私達が怒っていたのは、その男の人の片手にはスマートフォンが握られていたことだ。いまや社会問題となっている、通称「ながらスマホ」である。最近、本当によく耳にする言葉だと思う。近年、スマートフォンが普及してきて、特に若い人のマナー違反が目立つ。街で「ながらスマホ」をしているのは、やはり、若い人が多いように感じる。

今回は、事故にはつながらなかったが、もし、何秒かずれていたら……。もはや「ヒヤッ」どころではない。大惨事である。ちょっとした気の緩みが自分だけでなく、他人の人生をも変えかねないのだ。便利な物の普及にはもちろん良い所もあるが、悪い所もつきものである。夢中になりすぎず、マナーを守り、そしてけじめをつけたスマートフォンの使い方をしてもらいたい、と心から思う。

もう一つ、最近思うことがある。また、先ほどと同じ道のことである。どの道でも同じだと思いが、この道も通勤ラッ

シュ時の交通量は特に多い。数秒ごとに車が横を通り過ぎていく。子ども達も使っている通学路であるのに、速度を落とさない車がとても多い。もう少し気を使ってもらいたいものだ。ほかにもたくさん道路はあるはずだが、通勤のためにこの道路を使う人の多くは、「抜け道」として利用しているのである。それもそのはず、この道路には信号がない。だから、余計にスピードが出てしまうのだろう。通学路として使っている私達は、毎日怖い思いをしている。また、それを見た小学校の先生や、児童の保護者も、心配で、毎朝の旗当番を始めた。先生や保護者が黄色い旗を持って、立っているにも関わらず、スピードを出して通り過ぎていく車は一向に減らない。

「この道路を使う人が皆、安心して使えるようになってほしい」という願いが届き、マナーの悪い人が減ってくれば嬉しい。

事故は、起こしてから後悔したのでは遅い。過去には戻れない。「防げる事故は防ぐ」、口に出すのは簡単だが、実現するのはなかなか難しいことだ。だから、私は、日頃から一人一人が交通安全を心がけて、無駄な事故や困る人が出なくなるのを心から願う。「自分は大丈夫」という根拠のない自信を捨て、「油断大敵」を肝に銘じて行動することが大切だ。そして、誰もが安心して暮らせるようになれば最高だ。

## ヘルメット着用 of 安全さ

愛媛大学教育学部附属中学校

二年 梶野 孝介

「今日からやった。お母さんアレとつて。」兄が玄関先から母に声をかけた。春から高校一年生になった兄は、家から自転車通学で高校に通っている。六月のある日、高校から配布された黒のスマートなヘルメットをかぶって帰宅してきた。

「なにそれ。どしたん？」

ぼくが兄に聞くと、少し嫌そうな顔で、

「明日から、俺ら高校生もお前らと一緒にヘルメット君やな。」と、ヘルメットをかぶった自分の頭をコンコンと手でたたきながら部屋に入っていた。僕は、自転車で中学校まで通学している。自転車のルール、マナーの講習を学校で受け、免許証のような役割をはたす許可証を配布されなければ、自転車通学はできない。もちろん、ヘルメットは完全着用することがきまりであるため、毎日汗だくになりながら、ヘルメットをかぶり登校していた。はつきり言うところ、頭のあたりがじめじめしてあまり着用はしたくなかった。母は、僕のヘルメットをかぶった姿を見て、笑いながら、「どしたん、きのこみたいやね。」

と言った。確かに、白くて丸い形のヘルメットは、きのこみたいではずかしい。ヘルメットは頭を守るもの、大事な事は分かっているけど、まず見た目があまりかっこよくなくて、夏は暑い。部活をした後の汗をかいた頭にのっけたら、真夏はまるでサウナのような。そのうえ、雨の日はかっぱのフードがかぶられない。そのため、いつも頭はびちょびちょになる。

学校につく頃には、風呂あがりのような僕に友達も苦笑いだ。

そんな中、通学途中にすれちがう高校生のさわやかな自転車姿にあこがれを抱いていた。かっこいい先輩が、ヘルメットなしで自転車を乗りこなして、横を通り過ぎていく。そうか、高校生になると憧れていたさわやかな通学ができるようになるのか。僕は、自分の白いヘルメットがなくなっただけで満足した、そのままの頭で高校へ通う姿を考えると、なんだかうれしくなった。

すると、高校生の兄が今年六月のある日から、ヘルメットの着用が義務づけられるようになった。僕は、とても衝撃を受けた。

全国初。愛媛県の県立高校生のヘルメット着用は、高校生の自転車での死亡が相次ぐことを受け、県教育振興会が、ヘルメット無償配布をし、愛媛県もそれを援助して、兄は今黒のスマートなヘルメットをかぶり通学している。しぶしぶだった兄は、先日、交通事故の目撃者になり変わった。学校の帰り道、道路で倒れていた人を数人の高校生が発見、通報をし、救急車を呼んだそうだ。兄たちは、状況が分かっていたので、事情を説明したらしい。兄は、中学の部活を引退する時に後輩からもらった大切なタオルを、血が止まらないその人へ緊急手当てをするために渡した。兄は急いで帰宅し、興奮気味に僕に話してくれた。母は、「もしものことは誰にでもおこりうるからね。きつと心強かっただろうね。」と話していた。

普段、僕らは自分は事故に遭うとは全く思わずに、自転車に乗ったり、歩いたりしている。でも、道路では救急車が行

きかったり、身近でも、車の接触、人との接触は、一度くらいヒヤッとすることがあると思う。

あの時、きちんと止まっていたら、あの時ヘルメットをしていたら、あの時ちゃんとスピードを緩めていたら…。

ぼくが、朝学校へ行く時に母はくどくどと、

「ヘルメットはつけたの？気をつけていくんよ、安全第一だよ。」

と、戸を開けて登校する直前まで声をかけてくる。その時は、うるさいなと思っていたが、僕の命は一つで、僕が帰ってくと安心した顔をする母の心配はありがたいと感じるようになった。兄も、あの事故を見て以来、運転が丁寧になったと言っている。

そして、そんなある日、あのタオルが友人の手を介して兄の手に戻ってきたのだ。きれいに洗濯をし新しいタオルを添えて。ケガをされた方の感謝の気持ちも伝わってきた。僕は、兄を誇らしいと思う。後輩からももらった大切なタオルを事故に遭い怪我をした人に渡す兄はカッコいい。

ヘルメット着用した全国初の高校生の自転車通学する姿を、僕は誇らしいと思う。今まで全く違った姿に憧れていたぼくだったが、中学校での自転車通学も、悲しい思いを自分や家族、周りの人達にさせないために、ルールやマナーを守るよう努めたいと思った。

朝から僕ら兄弟は、黒いヘルメット、白いヘルメットをかぶり、高校、中学へ登校していく。

## 兄のヘルメット

松山市立桑原中学校

二年 野上 千風優

六月三十日、兄が高校からヘルメットをもらって帰りました。自転車通学の時、かぶって行くことになったそうです。愛媛県から高校生に配られたものでした。ヘルメットをかぶることが決まった時、家族みなが「えー!?格好悪い!!」といていたし、兄も「かぶらずに持って行って学校の近くでかぶるようにする」と言っていました。

もらった次の日は雨で、兄はヘルメットと合羽の頭の部分がきつい、と文句を言いながら学校へ行ききました。私が学校から帰ると、雨に濡れたヘルメットはベランダに干されていました。私も高校生になって、ヘルメットをかぶるのは格好悪くて、嫌だなあと思いました。

ある日、兄が、「明日から真面目にヘルメットを被って行く」と言いました。今までは、もらった時に受けた説明通りには被っておらず、あごのひもをゆるくして、頭にただのせているだけでした。訳を聞いてみると、兄の学校に、ある女の子が来て、自分の娘の話をしてくれたそうです。その人の娘さんは、十九年前に自転車で登校中、交通事故で亡くなったそうです。交通事故の恐ろしさ、家族を失う悲しさを話してくれたそうです。それを聞いて、命の大切さがよく分かり、きちんとヘルメットを使って、自分の命を守ろう、と思ったそうです。

芸能人の男の人も、トライアスロンで自転車で転倒し、大ケガをしました。実際、写真を見てみると、顔がとてもはれ

ていて、出血がひどかったです。その時に「ヘルメットをしていなければ、命に関わる事故になっていたと思います。ヘルメットの大切さを改めて思い知らされました。」と言っていました。ヘルメットは大事な命を守ってくれるのだと思います。

家の近くでも高校生がヘルメットを被って自転車で乗っている姿をよく見ます。皆が被っていたら、格好悪くもないような気がしてきました。高校生だけではなく、自転車で乗る大人の人も皆、自分の命を守るようにすればいいと思います。

去年、大三島へ遊びに行った時、サイクリングをしている人が大勢いました。皆、格好良い自転車と同じユニフォームを着て、ヘルメットを被っていました。こんな風に、団体でサイクリングをしている人たちがヘルメットを被っているのに、今まで、毎日通学している中高生が被っていない事がおかしく思います。

最初に見た時は、髪型がくずれそうだし、頭の中が暑そうだし格好悪くて、絶対に被るのは嫌だと思っていましたが、今では、自分の命を守ってくれる大切な道具だと思っています。

事故はいつ起きるか誰にも分かりません。この一つしかない命を大切に、事故が一つもない町を自分達で作りに上げていきたいです。

## 危機意識をもつて交通事故防止

愛南町立一本松中学校

二年 木築 虹子

数か月前、私の住んでいる地域で交通事故が起きました。ケーキ屋で三歳の男の子を連れた母親が買い物をしていたとき、母親が目を離したすきに、男の子がケーキ屋の前の車道に飛び出したのです。そこにちょうどバスが来て、バスは急ブレーキをかけましたが間に合わず、男の子をはねてしまいました。男の子は即死でした。あまりの衝撃に、その場から一瞬、音が消えてしまったような、時間が止まってしまったような、異様な状況だったと言います。実際は、ブレーキ音、衝撃音、叫び声や泣き声など、たくさんの音が不規則に乱れ飛んでいたはずなのですが……。ついさっきまで、元気にはしゃいでいたわが子の変わり果てた姿を目のあたりにし、何とか生きさせようと体にすがり呼びかける母親の姿が想像できません。きつと何度も何度も子どもの名前を呼んだと思います。この事故のことは、帰宅途中の車の中で、先輩のお母さんから聞きました。現場に居合わせたわけでもなく、人伝えに話を聞いただけの私ですが、寒気がし、全身に鳥肌が立ちました。

起きてしまったことを振り返って、「もしあの時」と考えても何も変わらないのですが、ついつい考えてしまいます。もしあのとき、母親がしっかり子どもの手を握っていたら、もし目を離さなかったら、今頃は、買ったおいしいケーキを親子で食べていただろうと。家族団らんの時を過ごしていただろうと。そして、十年後、二十年後、その男の子はどんなに

成長していただろうか、新しい家庭をつくって幸せにくらしていたかもしれない……と考えを巡らせるほど、胸は締めつけられる思いでした。

先日、友達と一緒に事故現場を通りました。「ここ、事故があったんだよね。」という友達の問いかけに、私は短く「うん。」と答えました。すると、友達は、たくさんの花やジュースなどが供えてある方向に向かって静かに手を合わせました。私も手を合わせました。悲しさがこみ上げてきました。全くの他人である私さえそうなのですから、身内の人たちであれば、後悔や悲しみ、やり場のない怒りや恐怖など、複雑な思いに押しつぶされそうになるだろうと思いました。

交通事故は、一瞬で人の命を奪っていきます。何よりも恐ろしいのは、交通事故は、時も場所も人も選ばないところですよ。どんなにルールを守っていても、巻き込まれることがあります。絶対に安全だと言い切れないのが交通事故です。だからこそ、他人事だと思っではいけないのです。

皆さんは、横断歩道を渡っていますか。信号を守っていますか。対向してくる人や車のことを考えないで、自由奔放に歩いていませんか。自転車や自動車のハンドルを握っていますか。ルールを守らずいい加減な気持ちで公道を使っていると、事故にあう可能性は限りなく高くなります。事故にあった後で、「この苦い経験を次に生かす」などという甘い考えは通用しないのです。やり直しがきかないことが多々あるのが交通事故なのだということを認識しなければなりません。

自分のために、人のために危機意識をもって行動すること

が、交通事故防止につながる、一番大切なことではないかと、私は思います。私が行動で示すことが、友達を動かし、友達がまた同じように示すことが、その次の誰かにというように、波紋のように危機意識を広げていきたいと思っています。



# 自分の命を自分で守るために

新居浜市立西中学校

三年 河野 有里子

夏休みに、あるテレビ番組で、スタントマンが交通事故にあった時の状況を実演していました。ある自転車と車の衝突では、身体が投げ出されて、車のフロントガラスに頭をぶつけていたり、自転車同士がスピードを出してぶつかった時の衝撃を見て怖くなりました。スタントマンの人は、身体を鍛えて訓練しているから大丈夫でした。でも、中には大けがをしている人もいました。もしこれが自分だったら、きっと命を落としていると思うと恐ろしくなりました。スタントマンの人たちは、みんなに交通事故を起こしてほしくないという強い願いで、命がけで実演しているという話を聞いて、改めて交通事故を起こさないためにどうすればいいのか考えるようになった。

私は自転車で通学をしています。特に意識せず走っていましたが、今年六月に、自転車の罰則が厳しくなるとニュースを聞いたときは、自分の走り方で注意されたり、捕まったりしないかと心配になりました。そこで、ネットで調べてみました。すると、今まで平気で行っていたことが、自転車の交通ルール違反だったり、知らなかったことがわかって驚きました。

ひとつはベルでした。今までは自転車で走っている時、大勢で道いっぱいに広がって歩いている人がいたら、追い越せないで、そこをどいてほしいという風にベルを鳴らしていました。すると、音を聞いて道をあけてくれました。当たり

前だと思っていましたが、これを違反だと知り驚きました。自転車に乗ってる人が、前を歩いている人によってほしいときは、自転車に乗っている人が降りて、危なくないところまで押していくのが正しいそうです。自転車に乗り始めた小学生の頃は、ついうれしくなり、よくベルを鳴らしていました。これも違反だと知りました。

二つ目は、標識や信号の見方でした。走っている時に、標識を気にしたことがなかったけれど、道路には自転車に乗っている人が守らないといけない標識がたくさんあることを知りました。特に、一時停止の標識を守らないと事故に遭ってしまふのに、気にせず止まらないまま走っていた自分が怖くなりました。普通に通学で使っている道が、自転車通行可という特別な歩道だということや、中学生は十三歳以上だから歩道を走ってはいけないことも知りませんでした。当たり前のように歩道を走っていたので、信号はいつも歩行者専用の信号を見て渡っていました。自転車は車の仲間だけれど、車のルールと同じように守らなくてはいけない規則があると知らずに走っていたら、事故を防ぐことなんてできません。

一方で、交通ルールを守っていても事故に遭うこともあります。私の祖父は、安全運転で単車で走っていたのにスピードを出して走っていたバイクに追突されて生死をさまよう大けがをしました。運よく命は助かりましたが、その後、何十年も後遺症に苦しんで、何度も入院を繰り返して、五十七歳で亡くなったと祖母に聞きました。事故に遭ってなかったら、私は祖父に会うことができたかもしれないです。交通ルールを守らない人のために犠牲になった人がいると思うと、自

分が加害者にならないようにしなければいけないと強く思います。

追突された時、祖父はきちんとヘルメットを被って走っていました。ヘルメットは、重くて暑くて、面倒で、学校に行く時しか被りたくはありません。でも、自分が交通ルールを守っているのに事故に遭ってしまった時、自分を守ってくれるのはヘルメットなんだと思うと自転車に乗る時はヘルメットを被るのは当然のことだと思います。今年の七月に愛媛県の県立高校では、全員にヘルメットが無償で配布されて、朝の風景が変わりました。高校生なのに、格好悪いヘルメットを被らされて嫌がってるだろうと思っていたけど、ちゃんと被って通学しているのを見て驚きました。紺色のヘルメットの女子高生をよく見かけますが素敵だと思いました。特に女子高生は見た目を気にしそうなのに、自分の命を守るために大切なことが分かっているんだと思います、とても感心しました。

毎日のように、交通事故のニュースが流れています。事故を起こした人も、起こされた人も、そして、その人の家族や友人みんなが辛くて悲しんでいることでしょう。交通事故をなくすために、まず、交通ルールをもっと学びたいです。そして、自分の命を守るためにヘルメットを被り、思いやりの心を持ち道路を走りたいと思います。

## 守ろう大切な命

愛媛大学教育学部附属中学校

三年 児島 芽依

私は夏休みに、毎朝新聞を読むようにしています。受験生にもなり、学校に通っているときにはなかなかゆっくり読めなかつたので、この機会にいろいろな記事を読んで見分を深めようと思ったからです。新聞にはたくさんニュースや事件・出来事が載っていますが、その中でも交通事故に関する記事や交通安全に関する記事が多いことに気が付きました。

愛媛県では、毎年交通事故を減らすため、アンダー作戦が行われています。昨年と今年は、アンダー五〇を掲げましたが、それを上回る死亡事故が起き、目標は達成できませんでした。このところ愛媛県では、交通事故の発生件数や交通安全に対する意識や警察署などの啓発活動が浸透してこのような結果につながっているのだと思います。しかし、交通事故や死亡事故の件数は減少しているものの、子供や高齢者が犠牲になる事故の割合は決して低くありません。

愛媛県では、「サイクリングパラダイスえひめ」の実現を目指して、自転車による地域振興を推進しています。そのためにより安全な自転車の利用を実現しようと、「愛媛県自転車の安全な利用の促進に関する条例」を一昨年制定し、県民に安全な自転車の利用を呼び掛けています。自転車による交通事故の場合、重大な事故につながっていた多くのケースは、ヘルメットを着用していないことが原因でした。これを受けて、愛媛県では全国に先駆けて県立高校に通う生徒のヘルメ

ット着用義務化を今年の七月から始めました。中学生である私は自転車通学の時にヘルメットを着用しています。高校三年の兄も七月からヘルメットを着用して通学しています。初めは抵抗があったようですが、今では習慣化され、夏休み中も着用して登下校しています。大人のヘルメット着用者も以前と比べると増え、中にはヘルメットの着用モデル事業に協力している企業もあるそうです。

一方で、通勤や通学の際にはヘルメットを着用してはいるものの、私生活の場面ではほとんど着用していないのが現状です。プライベートになると、多くの人がヘルメットをかぶっていないということは、義務であるからかぶっているのであって、安全を意識してかぶっている人は少ないのではないのでしょうか。このことが一つの課題であり、自転車による重大な事故を無くすためには、ヘルメットをかぶることの日常化が大切だと思います。

もう一つの課題は、交通ルールやマナーを守らない人がいまだに多いということです。私の家では兄と私が自転車通学をしています。二人が学校に登校する時、母は毎朝、「行ってらっしゃい。気をつけてね。」

と声を掛けてくれます。学校への登下校で安全に行き帰りできるような見守ってくれています。毎朝、私たちのことを気にしてくれている母に心配をさせないよう、私は安全運転を心がけています。しかし、通学路を通っていると、危ないと思う場面をよく見かけます。左側の自歩道を走行していると、前から右側通行で横に広がって走る自転車の列に出会うことがあります。こうした行為は、通行する人にとって、大変危

険で迷惑だと思えます。また、高校生や大人の中には、自転車を運転しながら携帯電話やスマートフォンを操作している人がいます。「注意一秒、けが一生」といいますが、大切な命と引き換えにするほど、通信機器を運転中に操作することは重要なことなのでしょうか。命を守るために、高校生のヘルメット着用が義務化されたのであれば、自転車を運転中のマナーについてももっと真剣に考えるべきだと思います。「ながら運転」や「ながら歩行」は自分だけでなく、周囲の人を危険な状況に巻き込むことになるのです。

七月末現在、県内の交通事故発生件数は昨年より三百三十二件減少し、傷者数は四百五十三人減少しています。一方で、死者数は四十七人で、昨年より十人増加しています。このうち自転車利用時の交通事故死者数は十一人で、昨年度の同期より八人増加しており、この犠牲者の大半が子供と高齢者です。気軽に利用する自転車ですら、重大な事故に巻き込まれることが多いのです。

自転車だけでなく、車やバイクに乗る人たちも含めて、社会全体で交通ルールを守ることやマナーを向上させることを考える必要があると思えます。飲酒運転や危険運転など命にかかわる重大な事故につながりかねないマナーの悪い行為をする人も後を絶ちません。一瞬の気のゆるみや自己中心的な考え方が重大な事故につながります。命は何物にも代えがたいのです。自分の命と自分の周りの人の命を守るために、本気で交通安全に対する意識を磨き、徹底する必要があると思えます。私自身も、誰もが安心して生活できる社会を築くためにルールやマナーをしつかり守りたいと思えます。

## その行動が与えるちから

愛媛大学教育学部附属中学校

三年 家木 里紗

「人の役に立つ」言葉では簡単に言えるが、実行すると、難しいものだと感じた。そして、自分もされた相手も嬉しくなり、好循環が生まれる。最悪の事態を考えると、行動できた自分がとても誇らしい。

ある朝、私が学校へ向かうため交差点で信号待ちをしていた。私の前にはすでに待っている方が二人いた。一人は若い女性で、もう一人は白い杖を持った、中年の男性だった。私はその杖を見た時、「目の見えない人だ。」と分かった。分かったものの、私は、「点字ブロックの上は歩かないでおこう」くらいにしか思わなかった。すると赤信号の間、女性が盲目の男性に何か話しかけて、女性は自分の右肩に男性の左手を乗せた。そして信号が青になると、「青になりましたよ。」と言って、点字ブロックに沿ってゆっくりと一緒に渡り始めた。私はやっと、女性の行動の意味が分かった。この交差点の信号は音のならない信号のため、女性は男性が不安だろうと考え、「安心、安全に横断歩道を渡ってもらおう」と考えたのだ。一度、「知り合いなのかな」と思ったが渡り終えて言葉を交わした後、男性と女性は左右に分かれていたため、違うことが分かった。私はこの時、女性の勇氣と優しさに心を動かされた。本当に実行力のあるすばらしい人だと思った。それと同時に自分の行動を省みて、恥ずかしく思った。

私は小学生の頃、盲目の人の体験をしたことがあった。目を隠し、まずは人の助けをなしに校内を歩いてみた。耳だけ

が頼りで、周りに人が歩いていたりすると「ぶつかってしまふのではないか」と思い、立ち止まったり、さらに走っている人とすれ違ふのを感じると恐怖を覚えた。目が見える人にとつては、道を走るのも歩くのも当たり前で、盲目の人がどんな思いで歩いているか、どんな恐怖を感じているか考えることがないと思う。しかし、考えずに自転車で並列になって走行したり、友達とふざけて歩いたりしていると大きな事故につながるのだ。そして、盲目の人は一度事故に遭ってしまったら、また一人で道を歩くことが怖くなるのではないかと思う。もし、不注意で何も考えずに行動すると、被害者である盲目の人に身体と心の傷を負わせてしまう大きな事故へとつながるのだ。

一方で、盲目の人に手を差しのべるとどうだろうか。私は実際に友達の手を借りて歩いてみると、恐怖がとても薄らいだ。人が一人自分のそばにいてくれ、リードしてくれたり、声をかけてくれるだけで大きな安心感に包まれるのだ。

私はこの経験をもとに、あの女性が手を差しのべてくれた、盲目の男性の気持ちと考えた。私が思うに、盲目の方にとって「音のない信号」はとても怖いものであると思う。頼りは自分の耳だけだ。それに、交差点となると左折してくる車だつてあり、目が見える人でも危険だ。盲目の男性が最悪の場合、まだ信号は赤なのに、渡ってしまふ事故に遭ってしまったら、おかしくはないのだ。男性にとつて手を貸してくれた女性はまさに「ヒーロー」であろう。女性は男性の「危険」を「安全」に変え、「不安」を「安心」に変えたのだ。私は改めて男性を手助けした女性を尊敬し、自分もその女性のように

に「人の役に立ちたい」と思った。

それから半年くらい過ぎ、正直自分が半年前に決意したことや、女性が盲目の男性を助けていたことも忘れていた。ある日、学校から帰る途中で雨が降り出した。私は急いで家へ帰ろうと思っていた時、再びあの盲目の男性を見たのだ。私はその男性を見た瞬間、あの時の男性だと分かった。頭の片隅であの時の出来事が焼きついていたのである。雨のため、歩行者は少なく、私と盲目の男性の二人のみだった。しかし、その反対に走っている車両はいつも以上に多かった。私は、あの日の朝と今とでは決定的に違うことに気づいた。あの日は晴れていたため、車のエンジンの音が比較的、聞こえやすかったと思う。しかし、今は雨が降っていてエンジンの音が聞こえにくい上に、車の運転手の視界も悪いという悪い条件がそろっていた。そのため、私は肩に手を乗せて、リードしてあげることはできなかったが、信号が青になると、盲目の男性に、「青になりましたよ」と声をかけ、左折してくる車に備えて男性の歩調に合わせて左側を歩いた。渡り終えると男性は、私が一緒に歩いてきた事にも気づいたようで、「ありがとうございます」と丁寧な礼を言ってくれた。私は達成感でいっぱいだった。ついに私も、あの時の女性のように人の役に立て、男性を危険や不安から守ったのだ。

私は将来、医療関係の仕事に就き、多くの人の役に立つ人間になりたい。今回の経験で人の役に立った時の達成感と嬉しさを味わい、今まで以上に夢を叶えるために努力している。今後も交通事故を減らすため、自分に出来ることを見つけ、実行しようと思う。

## 交通事故を減らすためにできること

松山市立内宮中学校

三年 齊藤 太一

電話のベルが鳴ると、僕は思わずドキッとして動きが止まる。応答した家族の明るい声が聞こえて、やっと胸をなでおろす。そんなことがずっと続いている。もう何年も。

七年前、僕の祖父は交通事故の被害者となった。お昼の休憩に僕と昼食を取り、再び会社に戻る際、横から勢いよく出て来た自動車にバイクごとはね飛ばされたのだ。祖父は十数メートル先まで飛び、全身を強く打って倒れたまま動けなくなっていたところ、通行人の方々に救護され、そのうちの一人の方が僕の自宅に電話で事故を知らせて下さったのだ。

すぐに病院に向かうと、ついさっきまで元気だった祖父が痛々しい姿で横たわっていた。泣き言や弱々しい姿を一度も見せたことのない祖父が、とても苦しそうな表情で「痛い、痛い」と訴え、目には涙を浮かべていた。検査の結果は全治六カ月の重傷だった。

警察の方のお話では、もうほんのわずか遠くに飛ばされていたら、数メートル下の川底に落ち、こんなケガではすまなかっただろうということだった。そしてその時祖父が乗っていたバイクを見たが、原形をとどめていない位に変わり果てており、衝突の激しさを物語っていた。

現在、祖父は普通に生活できるまでに回復している。しかし、祖父は再び職場に戻ることなく定年を迎えた。四十年以上働き続けた祖父が、このような形で退職の日を迎えることになるのは想像もしていなかった。家族でお祝いをしたが、

その時の祖父の何ともいえない淋しそうな笑顔が、僕の脳裏に焼き付いて離れない。

連日、交通事故発生ニュースはメディアを通じて報じられている。年内に起きた交通事故の発生件数やケガ人、死亡者数も、いたるところに掲示されているし、常に交通安全について意識することができると環境に僕らは暮らしている。なのになぜ、交通事故は一向になくならないのだろうか。

その原因の一つは、一人一人の「危機感のなさ」にあるのではないかと僕は考える。誰しも今、この瞬間にも自分が交通加害者、もしくは被害者になる可能性があるのだという認識が、大人も子供も浅いような気がしてならない。交通事故を回避するために、「大丈夫だろう」という安心感ではなく、「危ないかもしれない」という危機感を持ち続けるべきなのだ。この「危機感」が足りないがゆえに、不注意運転や飲酒運転で検挙される者が絶えず、悲しい事故に苦しむ人が減らないのではないだろうか。

自動車に限ったことではなく、自転車にも同じ事が言える。中学生である僕達にとつて自転車は手軽に遠方まで行くことができる便利な乗り物だ。自転車にはエンジンがついていないから歩行者と同じ扱いになると誤って認識されがちだが、自転車も一歩間違えば交通加害者となりうることを忘れてはいけない。実際、無謀な自転車の運転で歩行者を傷付け、訴訟問題となっている事例もある。加害者となってしまうのに大人も子供もないのだ。自動車も自転車も、見方を変えれば大きな鉄のかたまりであり、便利な反面人間の命を簡単に奪うことのできる「走る凶器」となってしまう。そしてそれは

人命だけでなく、その事故に関わる人全てのその後の人生までも破壊し奪い去ってしまうものだ、という「危機感」をいつも忘れずにハンドルを握らなければならない。

一方、自分の命は自分で守るという能動的な取り組みも大事だと思う。愛媛県ではこの春、公立高校生の通学時ヘルメット着用をスタートさせた。これは交通安全を受け身でとらえるのではなく、一人一人の問題として我々学生に考えさせ、行動させるいいきっかけになったと思う。実際、高校生がヘルメットを着用する姿を目にし続けることで小中学生の意識も間違いなく変わってくるだろう。

どこにでも潜んでいる交通事故の危険。僕らにできることは限られているけれど、たとえ小さな一歩でも踏み出さなければ前には進まない。心に危機感を持ち、自主的、能動的に法を守り、考え行動できる人間になるよう心がけていきたい。そして、さまざまな交通安全運動や取り組みに尽力して下さっている愛媛県警の方々に感謝の気持ちを忘れずにいたいと思う。

あれから七年。祖父は不自由な右手のリハビリだと、畑仕事を始めた。痛みはまだ消えず、思うように作業ははかどらないが、祖父はいつも笑顔だ。「生きてこそ。」祖父の言葉が命の重さを教えてくれる。電話のベルは今も、ともすると忘れそうになる交通事故の恐ろしさを思い出させてくれる。これからもずっと命を大切にできる人間であり続けるために、いつまでも電話のベルに少しドキツとする自分でありたいと思っている。

# 自分の命を守るために

八幡浜市立真穴中学校

三年 井上 桃華

七月一日より、高校生が自転車に乗る時、ヘルメットを着用することが義務化されました。私はこのニュースに触れたとき、「嫌だな。かぶりがたくないな。」と思いました。今まで私は我慢してヘルメットを着用してきました。それは私の心の中に、「高校生になったら、ヘルメットをかぶらなくてもよくなる。」という思いがあったからです。そもそもなぜヘルメットをかぶらなくてはならないのでしょうか。私はこの機会に、その理由について考えてみることにしました。

最初に私が思い当たったのは、「自転車事故が増えているのではないか。」ということでした。そこでインターネットを使って調べてみることにしました。

私の予想に反して、自転車による交通事故は年々減少傾向にあります。死亡事故も減少傾向にあるのですが、平成二十六年には年間五百人以上の人が命を落としています。一日一人以上の人が亡くなっています。私は、自転車事故で亡くなった人の中に、ヘルメットを着用していれば、助かった人があるのではないかと思いました。

さらに詳しく調べてみると、「交通事故総合分析センター」の資料に行き着きました。その中に「どこを損傷すると危険なのか。」という題名のグラフが掲載されていました。胸部とともに、頭部が圧倒的に多い状況でした。さらに、ヘルメットを着用することで頭部損傷による死亡事故を四分の一に軽減できるというデータもありました。つまりヘルメットを被

ていれば、昨年度の死者は百五十人くらいになっていたのかもしれない。

ここまで調べてきて、私は、自分自身が何とつまらないことを考えていたのだろうと、反省しました。もし、私が命にかかわるような事故に遭遇した場合、そこで私の将来の夢や希望は終わりになります。私が自転車の事故に遭わないという保障はどこにもないので、自分の命を自分で守るためにも、ヘルメットの着用は重要なことだと思います。

私は、ヘルメット着用を義務付けることで、自転車の乗り方を考え直すことができるのではないかと考えています。今町の中の様子を見ると、自転車に乗っている人のマナーが悪いと感ずることがしばしばあります。

たとえば、歩行者優先のルールがありますが、守られていないのでしょうか。この当たり前のルールを忘れて、人混みの中をスピードを上げて通過する自転車を時々見かけます。

また、夜間はライトを点灯するというのも当たり前のルールです。ライトは自分の前方を明るく照らすというよりも、相手に自分の位置を正確に知らせるという効果の方が大きいと思います。実際、暗闇の中でライトを点灯していない自転車に出会うと、びっくりすることが度々ありました。

自転車による交通事故の原因として最も多いのは、飛び出します。左右を確認せずに交通量の多い道路へ侵入する行為です。以前テレビで人形を使った飛び出し事故の映像を流していました。これは本当に危険だと思いました。

歩行者優先、ライトの点灯、飛び出しをしないなどは、当たり前前のルールだと思います。これらの当たり前前のルールを

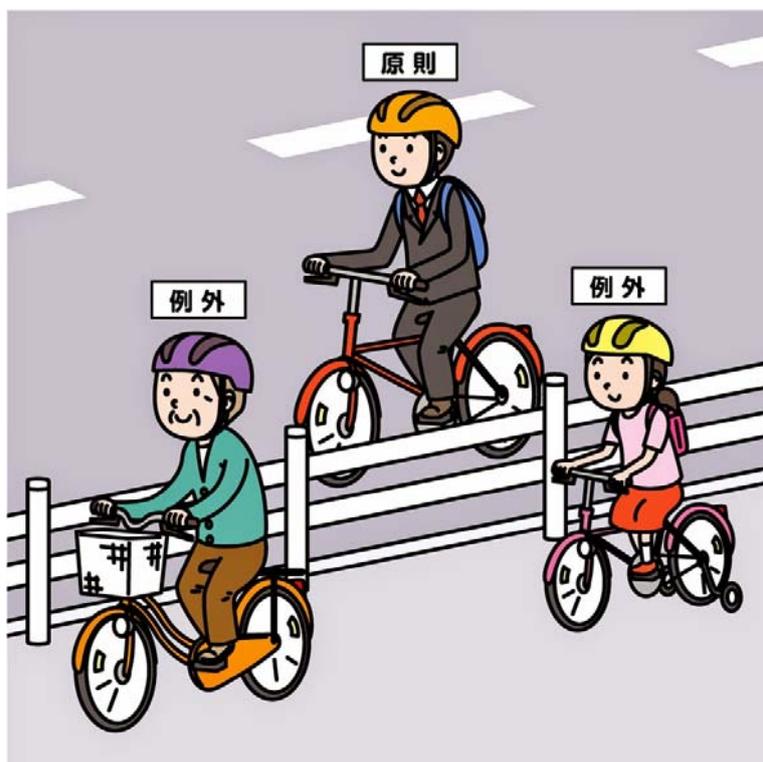
もう一度考え直す機会として、ヘルメットの着用は役に立つのではないかと思います。

ヘルメットを着用して、自分の命をしっかりと守る。そして自分の命と同様に、人の命をまもることを考えなくてはなりません。歩行者をはじめ、自分の周りにいる大勢の人たちもまた、自分と同じように公共の道路を利用しているのです。そこでは、みんなが交通ルールを守らなければなりません。気が緩んでいたたり、相手を思いやる気持ちが足りなかったりすると、大事故につながります。

他人の命を傷付けてしまうと、多額の賠償金や慰謝料を払わなくてはなりません。自分だけでなく、相手や自分の家族にまで悲しい思いをさせてしまうのです。

高校生のヘルメット着用は、私にいろいろなことを気付かせてくれました。以前の私は、大きな勘違いをしていました。ヘルメット着用を面倒くさいと感じたり、見た目が格好悪いと感じて、かぶるのを嫌がったりしていた自分は、本当に情けない人間だと思えます。

来年から始まる私の高校生活において、自転車は切っても切り離すことができない大切な乗り物です。しかし、使い方を間違えると大変危険な乗り物になることも分かりました。きちんとヘルメットを着用し、当たり前前の交通ルールをきちんと守って、安全運転していきたいです。「自分の命は自分で守る。」と思ってヘルメットをかぶる人が一人でも増えてくれればうれしいです。



# 自転車に「TSマーク」を貼いましょう！！

## ◇ TSマークには保険が付いているので安心

- 年に1回、自転車安全整備店で、点検・整備を受けると、そのしるしとして「TSマーク」が自転車に貼付されます。
- 「TSマーク」には、賠償責任保険と傷害保険の2つがセットになった1年間の付帯保険が付いているので、もしもの時に安心です。
- お近くの自転車安全整備店へご相談ください。



## ◇ 付帯保険の補償内容(H 26.10.1 ~)

補償内容	補償額等
① <b>賠償責任保険</b> (被害者が死亡等した場合に法律上の損害賠償責任を負った時の補償)	○ 死亡・重度後遺障害 (1~7級)  限度額 <b>5,000万円</b>
② <b>傷害保険</b> (自転車利用者が死傷等した時の補償)	○ 入院15日以上 <b>10万円</b> ○ 死亡・重度後遺障害 (1~4級) <b>100万円</b>
③ <b>被害者見舞金</b> (被害者が入院した時の見舞金)	(新設) ○ <u>入院15日以上</u> <b>10万円</b>



# インターネット完結型の自転車保険の販売開始

~ 自転車利用者のリスクに備える保険として26.11.11に開始 ~

☆ 全国的に自転車の交通事故で、約9,500万円などの高額賠償事案が増加！！

### 4つの特徴

- 1 事故の相手に対する賠償責任を **最大1億円** まで補償！
- 2 保険会社による **示談交渉サービス付き** なので安心！
- 3 自転車事故の他 **交通事故** によるご自身のケガも補償！
- 4 インターネット(愛媛県交通安全協会ホームページ)による **簡単な手続き** ！  
保険料の支払いは便利なクレジットカード払い！

### 加害者となり、損害賠償責任を負った場合の補償

1. 自転車で相手をケガさせた。
2. 自転車で他人の財物を壊した。



### ご自身のケガの補償

3. 自転車で転倒してケガをした。



◎ 詳細については、愛媛県交通安全協会のホームページをご覧ください。

## 交通安全年間スローガン最優秀作

○ 子供の部門（小・中学生からの応募）過去十五年間の内閣総理大臣賞

平成	十三年	あぶないよ よそみ おしゃべり ふたりのり
同	十四年	そこちがう しましまマークが ついてない
同	十五年	じてんしゃも いちじていしで みぎ ひだり
同	十六年	まあだだよ 信号青でも 右左
同	十七年	よくみてね！ いっぱいのぼした もみじのて
同	十八年	手を上げて しっかり見よう 右左
同	十九年	青だけど 車はわたしを 見てるかな
同	二十年	点めつだ 一度止まって 次の青
同	二十一年	じこがない そんなまいにち うれしいな
同	二十二年	さあかくにん ライト ブレーキ ヘルメット
同	二十三年	星キラリ 自転車ピカリ 帰り道
同	二十四年	いそいでも かならずかくにん みぎひだり
同	二十五年	ヘルメット ぼくのだいじな おともだち
同	二十六年	につぽんを じまんしようよ 事故ゼロで
同	二十七年	ルールむし しん号むしは わるいむし

～愛媛県交通安全協会ホームページ 広告協賛各社～

【四国中央市】

四国紙販売(株)  
大王製紙(株)  
丸住製紙(株)

【新居浜市】

一宮運輸(株)  
桑原運輸(株)  
住友化学(株) 愛媛工場  
住友金属鉱山(株) 別子事業所  
(株)ハタダ

【西条市】

四国開発フェリー(株)  
(株)田窪工業所

【今治市】

一広(株)  
今治造船(株)  
今治ヤンマー(株)  
渦潮電機(株)  
四国ガス(株)  
四国通建(株)  
瀬戸内運輸(株)  
太陽石油(株) 四国事業所  
波止浜興産(株)

【松山市】

あいおいニッセイ同和損害保険(株)  
アサヒビール(株) 松山支社  
(株)アテックス  
(株)井関松山製造所  
(株)伊予銀行  
(株)伊予鉄高島屋  
伊予鉄道(株)

(株)愛媛銀行  
(株)愛媛新聞社  
愛媛信用金庫  
愛媛総合警備保障(株)  
愛媛トヨペット(株)  
愛媛日産自動車(株)  
サークルケイ四国(株)  
JA共済連 愛媛  
四国電力(株)松山支店  
セコム(株) 松山統轄支社  
DCMダイキ(株)  
(株)たいよう共済 愛媛支店  
帝人(株) 松山事業所  
南海放送(株)  
日本郵便(株) 四国支社  
(株)フジ  
三浦工業(株)  
(株)四電工 愛媛支店

【伊予市】

マルトモ(株)

【伊予郡松前町】

東レ(株) 愛媛工場

【大洲市】

(株)オズメッセ

【八幡浜市】

(株)あわしま堂  
(株)サンリード

【宇和島市】

宇和島自動車(株)  
宇和島信用金庫



あんきょう

愛媛県交通安全協会・各地区交通安全協会

交通安全に対する意識の高揚と  
正しい交通マナーの向上に努めます。

一般社団法人  
愛媛県交通安全協会  
Ehime Traffic Safety Association

〒799-2661 愛媛県松山市勝岡町1163-7

TEL: 089-979-2101